

「自由自在のふるまい」

本山布教教化部布教室長 川原敏光

秋が深まり冬が近づいてくる頃は境内の木々の葉が風に吹かれて落ちてきます。この景色を見ながら思い出した句があります。

炊くほどは風がもてくる落葉かな (良寛)

この情景は、何かを炊く燃料として落葉を風が集めて持ってくるということでしょう。

これに似た句がもう一つあります。炊くほどは風がくれたる落葉かな (小林一茶)

こちらは風からいただいたという情景でしょう。

どちらも大切な部分は、「ほど」のところですね。何かを炊くのに丁度良い「ほど」の量があれば良いという意味がこめてあります。「知足」とはこの状態に他なりません。

私達はこの基準値があいまいで、けじめがつかないことが多いのです。欲望をおさえる事が出来る事と難しい事がありますがこの事が悩みになり、苦しみになるのです。

瑩山禅師は「小を要する時は小を使い、大を要する時は大を使う」(洞谷記)と示されています。小さいものが必要なときは小さいものを使い、大きいものが必要なときは大きいものを使う。あらゆるものは小と決まったものではなく大と決まったものではないということです。

こだわりやとらわれのない、バランスの取れた生き方や考え方は、自由自在に人との関係を保つことができ、行きづまりの少ない道が開かれてくるのです。

良寛さんの句は自力、小林一茶の句は他力ではありますが共に幸福になる為の条件として欠かせないものです。その為には、自分の幸福追求だけでなく、他人の幸福の為に生きることが大切であります。

瑩山禅師・道元禅師共に「自未得度先度他の心をおこす」ことの大切さをお示しです。自分がすくわれていなくても他人がすくわれるような生き方と誓願を持って菩薩行を進んでいきたいと思えます。